●課題研究　「学校知」を問い直す〈1〉●

青少年の学校生活への適応状況からみた「学校知」の現状と改革方向

上越教育大学助教授　犬塚　文雄

はじめに——学校教育臨床の視点からみた青少年の学校生活への適応状況

これまで学校教育臨床の視点から，多くの青少年と関わってきた。彼らの適応状況は一人ひとり個性的で一般化できないが，最近気になる傾向としては，“ちょっとしたことに傷つきやすく苛つきやすい，絶えず周りの目を気にして何かオドオドした自信のない様子，生き生きしたその子らしさが感じられない”そんな子どもたちが目につく。一体どうしてなのであろうか。

I．学校知を身につける原動力としてのコンピテンスの衰弱化

さまざまな要因が複雑に絡み合って，子どもたちを自分らしく個性的に生きられない状況に追い込んでいると思われるが，とくに，学校知との関連で注目したいのが，White（1959）の提唱するコンピテンス（「生体がその環境と効果的に交渉する能力」）の衰弱化である。

Erikson は，Evans（1967）のなかで，このコンピテンスを発揮しつつ，その時代が子どもたちに要請する社会的な価値や基準（すなわち，学校知）を身につけていくことが，彼らの心理・社会的発達にとってきわめて重要であることを指摘している。ところが，学校知を身につけていくうえで原動力となるはずのコンピテンスが発揮されていない，むしろ，衰弱化しつつある

傾向が窺える。一体どうしてなのであろうか。

なお，筆者は，子どもたちがコンピテンスを発揮している状態像を，「自分なりの見方・感じ方・考え方，自分なりのペースやリズムを大事にして生活を営んでいる状況」として捉えている。

Ⅱ　学校知を身につける原動力としての競争の過熱化

コンピテンスの衰弱化の背景には，competence が competition（競争）へと変質を余儀なくされている過熱化傾向が窺える。そうしたなかで，学校知を身につける新たな原動力となっているのが，“より早く・より正確に・より効率よく”の3原則に代表される結果至上の競争原理である。

なお，結果至上の競争原理に支配されている学校教育の状況を，大村（1990）は煽る教育と捉え，それにとって代わる鎮めの教育を提唱している。また，片岡（1990）は，いま全国の学校に蔓延している二大病理を東大病・甲子園病と呼び，その背景に結果至上の競争原理が強く働いていることを指摘している。

Ⅲ　青少年の心の危機：コンピテンス崩壊の危機

結果至上の競争原理に駆り立てられ，自分なりのペースやリズムを見失いつつある状態（コンピテンスの衰弱化傾向）が，さらに進行しピークに達した段階が，コンピテンス崩壊の危機状態である。“このままでは，自分のペースやリズムが押しつぶされてしまう”という危機感を，Erikson（1964）は根こぎ（uprooting）と呼んでいる。これは，自分の根をそぎ落とされた根なしのような寄るべのない心理状況を指し，青年期に入った子どもたちにとっては，アイデンティティ確立の困難な状況を示している。

ところで，こうしたコンピテンス崩壊の危機状態に対して，子どもたちなりに編み出した自衛策の代表が，“不登校”であり，“いじめ”である。前者が，いったん引き籠って自分のペースやリズムを守り通そうとする回避反応の表れであるのに対して，後者は，周りにお構いなく自分のペースやリズムを，強引に押し通そうとする攻撃反応の表れと言える。最悪の自体が，自

分なりのペースやリズムを自ら押しつぶしてしまう“自殺”であることは論を待たないであろう。

こうした事態を前にして，われわれは手をこまねいているわけにはいかないであろう。子どもたちの根こぎ状況を癒し，さらに，彼らが学校生活に根づく（根をはる）ことができるようになるために，いま具体的に何が求められているのであろうか。

Ⅳ　改革の方向――“競争”から“協創”へ

不登校やいじめによる自殺が深刻化する今日，予防の観点からも，学校生活のなかでコンピテンスを発揮しつつ学校知を身につけていけるように，子どもたちを支援していくことが強く求められている。

ところで，改革の方向を示すものの一つとして，筆者は，子どもたちが学校知を身につける場を，競争（competition）から協創（collaboration）へと，徐々に切り換えていくことを提案したい。協創とは，子どもたち一人ひとりが自分のペースやリズムを大事にしつつ，お互いに協力して，学校知を創造的に身につけていく過程を指している。先般公表された中教審（中央教育審議会）の第一次答申の全体を貫く精神である子どもたちの“生きる力”を育むために“ゆとり”を重視する考え方は，まさに，こうした方向を示すものとして筆者は理解している。すなわち，“生きる力”というものを，この協創の過程を推進する子どもたちの力（協創力：collaborability）として，また，“ゆとり”というものを，この協創過程の円滑な推進を可能とする彼らにとって自由で安全な風土（場の雰囲気）として捉えている。さらに，中教審の第一次答申でこれまた重視されている“総合学習”についても，情報・環境・国際理解・福祉といった内容面からの注目もさることながら，今後，この協創過程が総合学習の授業展開のなかでいかに反映されていくかに，筆者は注目している。

V　支援の手立てとしての学校カウンセリングと学校グループワーク

子どもたちの協創過程の円滑な推進を支援する実践的な手立てとして，筆者は，学校カウンセリングと学校グループワークに注目している。個と集団のいずれに力点を置くかの違いはあるものの，いずれも子どもたち一人ひとりのコンピテンスの発揮とその分かち合い（sharing with）を促す有効な手立てと言えるであろう。そして，今後，学校カウンセラー・学校グループワーカーとしての役割が教師に強く求められていくものと思われる。こうした動きは，すでに，中教審の第一次答申を受けて設置された教養審（教育職員養成審議会）の審議のなかでも，教員養成のカリキュラムのなかに学校カウンセリングを盛り込む方向となって示されている。さらに平成9年度からスタートした上越教育大学の学校教育専修のカリキュラムのなかでも，学校カウンセリングと学校グループワークは，学校臨床の共通科目として位置づけられている。

ただ，気になる点は，学校カウンセリングや学校グループワークは専門家任せでよしとする風潮が，未だ，一般教師の意識に根強く見られることである。繰り返しになるが，子どもたちの根こぎ状況を癒し，学校生活のなかで彼らが協創過程を推進していくうえでの支援の手だてとして，学校カウンセリングと学校グループワークの力量を磨いていくことは，専門家任せでは済まされない，とくに，これからの教師にとっては基本的な要件となっていくように思われる。もちろん，いじめによる自殺が深刻化するなかで，専門家や専門機関との連携を密にしていくことは大切なことではあるが……。

おわりに——コンピテンスの肥大化

本稿の前半では，結果至上の競争原理に駆り立てられるなかで，コンピテンスを衰弱化させていく青少年の不適応状況を中心に取り上げてきたが，逆に，競争の過熱化傾向のなかで，むしろ，過剰適応してコンピテンスを肥大化させていく青少年も目につく。小此木（1992・1993）は，こうしたコンピ

テンスの肥大化を病的自己愛と，また，肥大化の過程で，次第に現実と非現実の垣根が崩れていく状況をシゾイド（shizoid）化と呼んでいるが，筆者は，こうした肥大化の過程の延長線上に，オカルト教団に走るエリート青年たちの心の軌跡を読みとっている。

このようなコンピテンスの肥大化，すなわち，独りよがりのコンピテンスの発揮に陥らないためにも，学校生活のなかで子どもたちが学校知を身につけていく場を，競争から協創へと切り換えていくことは意味があるように思われる。この点に関連して，Young(1971）は，これまでの学校知に支配的にみられる特性の一つとして，学習の過程や成果の評価におけるグループによる作業や協力の回避といった個人主義的傾向をあげているが，協創は，まさに，こうした傾向を緩やかに改革していく方向を示すものである。また，Kohn（1992）は，競争システムよりも協同システムのほうが，むしろ，効率的・生産的であるという知見を報告している。こうした知見も，子どもたちが学校知を身につけるにあたって，協創的な取り組みの有効性を示唆するものと言えるであろう。

〈引用および参考文献〉

○Erikson, E. 1964 *Insight and responsibility,* W. W. Norton & Company Inc. 鑢幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房，1971年，75－104頁。

○Evans, R. 1967 *Dialogue with Erik Erikson,* Harper & Row, Publishers, Inc. 岡堂哲雄・中園正身訳『エリクソンは語る』新曜社，1981年，30－33頁。

○片岡徳雄『特別活動論』福村出版，1990年，214頁。

○Kohn, A. 1992 *No contest－The case against competition,* revised edition, Houghton Mifflin Company. 山本啓・真水康樹訳『競争社会を越えて』法政大学出版局，1994年，74－130頁。

○小此木啓吾『自己愛人間』筑摩書房，1992年，184－186頁。

○小此木啓吾『シゾイド人間』筑摩書房，1993年，187－219頁。

○大村英昭『死ねない時代』有斐閣，1990年，21－22頁。

○White, R. 1959 "Motivation reconsidered : The concept of competence" *Psychological Review,* 66, pp. 297－333.

○Young, M. 1971 *Knowledge and control,* Collier Macmillan, p. 38.